

はじめに

われわれの社会は、いま、「無痛文明」という病理にのみ込まれようとしているのではないだろうか。快にまみれた不安のなかで、よろこびを見失った反復のなかで、どこまで行っても出口のない迷路のなかで、それでもなお人生を悔いなく生き切りたいと心のどこかで思っている人々に、私はこの本を届けたいと思う。

第一章から第六章までは、一九九八年から二〇〇〇年まで雑誌に連載されたものを、原型をとどめないくらい書き直したものである。この連載は、思想に関心をもつ人々のあいだで大きな反響を呼んだ。

その後、結論部分に当たる第七章と第八章を、本書のために書き下ろした。第八章において、「無痛文明」の秘密が、最終的に解き明かされる。

現代社会のなかで、真綿に包まれるような漠然とした不安を覚えるとき、われわれは直観的に「無痛文明」の存在を感じ取っているのかもしれない。この本は、読者が一度は感じたことのあるであろうそのような感覚に、言葉を与えようとする試みなのである。